剣道部員の日常

安藤ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
剣道部員の日常

【Ｎコード】
Ｎ５７０５Ｎ

【作者名】
安藤ナツ

【あらすじ】
剣道部では良くあることです。

（前書き）

実体験です。

「っえーん！」

高々に打つ場所を宣言しながら、津田川涼が振り上げた竹刀を鋭く振り下ろした。その鋭さは、凡百の高校生では到底捌ききることのできない、熟練された力強さに満ちていた。

「せいっぃ！」

それと同時、涼の正面に構える堀田雪根が左手に持った竹刀で袈裟がけに切りつける。殆ど反射に近い速度で繰り出されるその剣戟に込められた力は、竹刀と言えど骨ぐらい折ってしまう威力は込められているだろ。

ここは、とある県立高校の武道場。たった二人しかいない剣道部員は、全力で竹刀を相手に叩きつけ続けていた。

もっとも、やっているのは剣道ではない。

涼も雪根も道着姿で胴や小手の防具は着けているが、肝心要の面を被っていない。雪根に至っては、普通の竹刀ではなく、二刀流用の小さな竹刀を左手に持つと言うルール違反をおかしている。

そんな状態で二人はかれこれ一時間、闘い続けていた。

「そんなんじゃあ、俺には当たらないぜ？」

銀髪緋眼の新里世界と。

いつも通り、黒い詰襟ベルトの学生服を来た世界が、正面から飛んできた涼の竹刀を容易く右手で掴み取る。それを力任せに引っ張り、後ろから飛んできた雪根の竹刀にぶつける。まるで後ろに目が

あるかのような回避行動に、涼も雪根も一瞬身体が強張り、そのあまりに大きい隙に、世界がため息をつく。

「ほい、通算十五回目のゲームオーバーだ」

台詞と共に、涼の竹刀を強引に奪うと、涼の喉元にそれを突き付ける。背後の雪根には、身体を捻って長い脚で胴に蹴りを叩き込む。竹刀を突き付けられ、公算と手を上げる涼と、蹴られてその場に尻餅をついた雪根を確認した後、

「はい。勝負あり。新里君の勝。涼雪根連合チームはこれで十五連敗」

やる気なさそうに、ゲーム機を持った小野なつめが勝敗を下す。彼女の足元には、袴やら面やら、剣道道具が一式転がっていた。

「だー！　師匠もう一回！　あと、小野！　あんた試合見てた？　いつからそのゲームやってんの？」
「いつからって、最初っからだよ」
「最初？　私が必死で戦ってる中ゲーム？」

喚きながら立ち上がった雪根は、ズカズカと音を立てて小野の前まで近づいていく。
今にも襲い掛かりそうな雪根を涼が宥めて、唯一の男である世界は「なんだかな」とぼやきながら銀髪の毛をかき混ぜていた。
ここで、この四人が良く分からない模擬戦をしている理由を簡単に説明しておこう。

雪根がやりたいと言ったからだ。

向日葵の委員会が終わるのを待つ間の暇つぶしを考えていた世界は、部活に向う涼と雪根に捕まってしまった。それだけの話だ。因みに、帰ろうとしていた小野を捕まえて強制的に審判をやらせたのも雪根だ。雑談だが、二対一でも勝てないことを悟り、いないよりましだと、小野に剣道具一式を渡したのも雪根だ。

徹頭徹尾、雪根の雪根のための模擬戦。

それがこの剣道場で行われているすべてであった。

「さて、どうする？　もう一回私としてはリベンジしたんだけど」

雪根と小野をなんとか落ち着かせた後、涼が竹刀を拾いながら提案する。世界の強さは重々知っていたのだが、まさかここまで手も足も出ないとは思っていなかったらしく、道場の娘と言う矜持が傷つけられたらしい。

「当然！　師匠良いですよね」

幼馴染の台詞に、これ以上ないくらい喰いつく雪根。こっちは、剣道のほかにも怪しい格闘術やらなんやらを学ぶほどのバトルマニア。あまり相手にしてくれない世界が、わざわざ手合せしてくれているのだから、自分から引く理由がない。

「まあ、いいけど。でも、小野はどうなんだ？　いつまでいるんだ？」

「ん？　まあ、私は何時まででもいるよ。儲かるしね。次も、世界君に賭けるから頑張って」

ぽきぽきと手を鳴らしながらの問いに答えて、小野がルーズリーフの切れ端に何やら書き込んでいく。

『世界　　一勝　百円　　なつめ　正正正
良、雪根　一勝　一万円　　』

どうやら、三人の勝敗は賭けの対象になっているようだ。世界が勝てば、賭けた人間と世界本人に五百円を涼と雪根が渡す。世界が負ければその逆。良い子は真似しては駄目だよ。

「なっちゃん。ちょっとはこっちに賭けてみようと思わないの？」

自分だって、小野の立場であれば世界に賭けるであろうが、ここまで賭けてくれないと言うのは少々裏切られた感がなくもない。

「いいじゃん。涼。勝って、師匠と小野から一万円巻き上げようぜ」
「それもそっか」
「ふん、大した自信だ」

対戦相手の軽口に、世界がにんまりと笑う。そして、いつでも来いと、犬を呼ぶようにしゃがみ込んで手を叩く。

その様子を見て、剣道娘二人は軽く笑みを引きつらせる。ここまで、あからさまに馬鹿にされるのは初めてだった。二人とも、全国クラスの実力者を自負しているだけに、その行為は如何にあの新里世界と言えど許せるものではなかった。小野は大爆笑していたが。

「どうする？　雪根。作戦なしじゃあ絶対に勝てない……」
「だー！　師匠、あんたは私を怒らせた！」

名前とは裏腹に、熱く浮ついた様子の雪根が叫ぶ。乱暴に篭手を外して、それを床に投げ、胴も外す。鎧が安心を産み、真剣さを奪っているんだと、雪根は涼に瞳で話しかける。

その瞳に押されたのか、涼も渋々防具を外していく。防具がなけ

れば、世界も攻めあぐねるかもしれない。そういう打算はあまりなかった。

「小野！　防具拾って隅に寄せて。そっから勝負再開よ！」

「何で私が、絶賛卵孵化中なんだけど」

ぶつぶつと文句を言いながら、小野はゲーム機を置いて、二人の足元にしゃがみ込んで防具を拾い。

「臭っ」

篭手を持った瞬間、それをすぐさま投げ捨てて小野が鼻を押さえる。

「涼ちゃん、ゆっきー。この臭いは駄目でしょ」

鼻の詰まった声で、小野が眉根に皺を寄せる。

「え？」「な、別に臭くなんて……」

「いや、臭い。なんか、納豆系統の匂い！」

思わぬ一言に、自分の腕の匂いを嗅ぎながら二人が反論する。

が、

「確かに、お前ら汗臭い」

世界の一言によって、二人は一気に膝をついた。

「あと、防具の臭いか？　なんか、消臭剤使ってるんだろうけど、その匂いと混ざって、奇妙な臭いを醸し出してる。ハーモニーして

る」

この一時間で、最高の攻撃力と鋭さを兼ね備えた一撃だった。

二人は素手「ぐは」ともがきながら自分の篭手を拾う。小動物のように鼻を動かしながら臭いを嗅ぐと、確かに匂った。それでも、言うほど臭くないと反論しようとしたのだが、

「って言うか、入った瞬間から臭いと思わなかった？」

「ああ、ちょっとな。なんか、もう染みついてるんじゃあないのか？」

無慈悲な追い打ちが続く。

「あ、もしかして堀田が香水の匂いがきついの、これのせいか？」

「違います師匠！　私のあれはお洒落です！」

「いや、お洒落と言う名の消臭だと思うよ？」

「涼！　あんたも反論しなさいって、どこ行くの？」

「シャワー」

殆ど泣きそうになりながら、雪根が叫んだ時には涼の姿はシャワールームに消えていた。

「ああ、聴いたことあるな。香水って元々体臭を隠すためにあんな臭いなんだってな」

「本当？　まるっきり臭い物に蓋の原理ね。全然科学的でも論理的でもないじゃん」

「だから、俺あんまり好きじゃあないんだよ。香水してる奴見ると、体臭が凄いんじゃあないかって邪推しちまって」

「わかるかも。あれって匂いがきついだけじゃなくて、しんそーしんり？　みたいなやつも関係しているのかもね」

「ああ、あるかもな。嗅覚ってそそもそも生きるのに都合のいい匂いを良い匂いにして、必要のない臭いを、くさい臭いにしてるだろ？　つまり、嗅覚って言うのは、俺達がまだ動物だった頃からの付き合いなわけだから、深層心理って言うか、魂の底に染みついていてもおかしくない」
「だね。犬とかなんて臭いで人間を判断するわけだから、人間だってそれくらいわかるよね」
「ん？　ってことは、汗を掻いて匂うって言うのは、一種の自己主張なのか？」
「かもね。匂うことで自分の存在をアピってるんだ。ならクジャクの羽とかと一緒？　って言うか、言葉を使わない動物は、目よりも鼻で相手を判断するんじゃあない？」
「なるほど。匂いと一口に言っても色々あるんだな」

二人の悪意のないトークが終わる頃には、雪根の姿も消えていた。

（後書き）

小手の臭いは酷いです。

こんな馬鹿馬鹿しい作品をもっと読みたいひとはテーマのリクエストを待っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5705n/

剣道部員の日常

2010年12月4日12時57分発行